

# インペリアル・ダーバーに関する 視覚メディア史的研究の現状と展望

本 田 毅 彦

## はじめに

英領インド帝国は、都合三回、旧都デリーにおいて「インペリアル・ダーバー（デリー・ダーバー）」と呼ばれる大規模な政治儀礼を行った。これらは、新たにイギリス国王Ⅱインド皇帝が誕生する機会を利用し、印象的で特徴的なイヴェントを実施することを通じて、英領インド帝国という政治単位からの、インド社会に対するソフト・パワーを強化する試みだった、と考えられる<sup>(1)</sup>。

インペリアル・ダーバーをめぐる大まかな経緯は、次のようである。一八七七年、イギリス女王ヴィクトリアのインド皇帝就任を宣言するために、インド副王エドワード・ロバート・リットンの下で最初のインペリアル・ダーバーが行なわれ（当時は「インペリアル・アセンブラージュ」と称された）、その政治儀礼としての原型が定められた。一九〇三年、ヴィクトリアの逝去によってエドワード七世がイギリス国王Ⅱインド皇帝となったことを宣言するために、インド

副王ジョージ・ナサニエル・カーゾンが二度目のインペリアル・ダーバーを企画し、実施した。ムガル帝国の伝統に近代国家イギリスが生み出した政治システムを接合する、いわば「ハイブリッドな権力」がイギリスによるインド支配なのだ、とのメッセージを、豪華で、多彩なイヴェントを通じて発することを企図していた。<sup>②</sup>さらに一九一一年には、エドワード七世の逝去によってイギリス国王Ⅱインド皇帝となったジョージ五世自らがインドへと乗り込んで、三度目のインペリアル・ダーバーを実施した。一九一一年ダーバーの基本的なアイディアは、一九〇三年のその焼き直しだったが、わずか数年の後に豪華なイヴェントがあえて再演されたのは、ジョージ五世がそれを強く望み、インド副王チャールズ・ハーディングも、そのようにする必要性が高いと判断したから、だった。<sup>③</sup>

# 一 インペリアル・ダーバーに関する、視覚メディア史的観点からの研究の状況

英領インド史上、インペリアル・ダーバーが最大規模で行われた政治儀礼ないしイヴェントであったことは、従来からもちろん認識されていた。しかし、政治史的な文脈では、「イギリス帝国の絶頂期において、イギリス人たちがその権勢をインド人たちに見せつけるために行った、華麗ではあったが、本質的には空疎な自己陶酔的イヴェント」だった、と位置づけられ、バーナード・コーンが一八七七年ダーバーに関して行った研究をほぼ唯一の例外として、本格的な研究は長く行われなかった。<sup>④</sup>同論文においてコーンは、詳細で具体的な分析を一八七七年ダーバーに施した上で、英領インド時代のダーバーは、インド社会に存在していた主要な政治儀礼を、イギリス人が自分たちに理解しうる形で、また、自分たちにとって都合のよい形に換骨奪胎して利用したものだった、との結論を導いた。

これに対して近年、インペリアル・ダーバーについて新たな視角を提起したのが、デイヴィッド・キャナダインであ

る。<sup>(5)</sup> キアナダインは、一九世紀以降のイギリス帝国の歴史全体を解き明かすことを目指して、「オーナメンタリズム論」を唱えた。すなわち、イギリス人たちは、彼らの階級主義的な社会観に基づいてイギリス帝国社会を形成しようとしていたのであり、その際には、装飾的な装置（オーナメント）が熱心に利用された、とする。そして、イギリス人たちのそうしたオーナメンタリズムの典型的な表現が、インペリアル・ダーバーだった、と。しかし、キアナダインの主張はアイディアの提示にとどまる部分が多く、実証的裏付けが希薄だった。また、インペリアル・ダーバーの開催がインド社会に対してどのような効果を及ぼしたのかという、メッセージの受け手側を分析する必要への関心が乏しかった。ただし、コーンが、一九〇三年ダーバーを設営したカーゾンは一八七七年ダーバーを強く意識し、その原型からはずれないことだけを心がけた、と述べていたのに対して、キアナダインは、むしろカーゾンこそがインペリアル・ダーバーのアイディアを構築する上で最もオリジナルな貢献を行なった、と述べており、これは非常に重要な指摘だと思われる。<sup>(6)</sup>

他方、英領インド史に言及しているわけではなく、また、歴史学研究のために生み出された概念ですらないのだが、オーナメンタリズム論の課題意識と通底する部分を持ちながら、より明快に、また、より包括的な形で、政治権力の文化的側面を解釈するための枠組みを提起したのが、国際政治学者ジョセフ・S・ナイのソフト・パワー論だ、と考えられる。<sup>(7)</sup> ナイは、現代国際政治のありようを説明するために、ある国際政治上の単位が行使しうるパワーには二つの種類がある、と指摘した。彼によれば、その一つは、他の国際政治上の単位を威圧する軍事力・経済力などのハード・パワーであり、もう一つは、他の国際政治上の単位を魅惑するソフト・パワーである。インペリアル・ダーバーというイギリスを成立させた中核的な要素の一つは、「イギリス君主制の権威ないし魅力」だった。そしてイギリス君主制は、イギリスという国にとり、そのソフト・パワーの源泉の一つとして、現在も機能し続けている。インペリアル・ダーバーという歴史上の事象を分析するにあたって、ナイの提起したソフト・パワー論を援用するのは有益な試みだ、

と考えられる。

キヤナダイン、ナイの視角に共通するのは、人々が、ある「社会」（ないし国家）に関して抱く「イメージ」に注目し、その形成と、それが現実政治の展開に及ぼす影響を測ろうとするところにある、と思われる。それでは、「社会」に関する「イメージ」とは、どのようにして創られるものなのか。それは、次のようなプロセスをたどるのが一般的であろう。ある社会が、大規模で激しい事態（事件）を経験することにより、それ以前に存在した、その社会について人々が抱いていた「イメージ」が解体する。しかし、ほとんど時を置かず、解体した「イメージ」のディテールも活用しながら、新たな社会の「イメージ」が構築され始める。

一九世紀のインド亜大陸においては、「ムガル帝国」というイメージ<sup>8</sup>が徐々に解体され、それと同時に、そのディテールを活用することによって、「英領インド帝国」というイメージ<sup>9</sup>が構築されていった。極端な言い方をすれば、英領インド帝国は「ムガル帝国」というイメージ<sup>10</sup>を主題とするテーマパークになっていたのかもしれない。そしてインペリアル・テーマパークの「メイン・キャクター」が、インド社会の藩王たちだったのかもしれない。そしてインペリアル・ダーバーは、インド亜大陸において伝統的に行われてきた君主の即位儀礼（*coronation*）を換骨奪胎し、テーマパークにおける最大の「祝祭」として行われたものだった。イギリス人たちは、インペリアル・ダーバーを通じて、インド亜大陸に住む人々に「英領インド帝国」を名乗る「社会」のイメージを理解させ、自分たちはその中で生きているのだ、という意識を受け入れさせることを期待していたはずである。

他方、インペリアル・ダーバーは、王室を含むイギリスの伝統的な支配層が、彼ら自身が社会的に生き延びることを目的として、自らを変化させ、また、彼らをとりにまく環境を変化させようとしてそれに働きかけ、一定の成功を収めた事例でもあった。具体的に言えば、三度のインペリアル・ダーバーを通じて提起され、洗練されていった、「イギリス

権力は、多元的で多文化的なインド社会において、唯一の公平で超越的な調停者である」との、「植民地支配を正当化するための最後の砦」とも言うべき主張は、イギリス王室ないしはそれに近い伝統的な支配層から案出されたものであり、それを補正したヴァージョンは、植民地支配終了後も、イギリス王権がイギリス連邦の統合の象徴としてとどまることで、王権と旧植民地社会のつながりを可能にしている。

キャナダインやナイなどが提起した、このような問題意識を共有しつつ、また、文化史への一般的な関心の高まりも背景として、近年、インペリアル・ダーバーに関しては、視覚メディア史的な観点からの研究成果が、急速に蓄積されつつある<sup>⑨</sup>。従来、研究者たちによって「時代遅れの、滑稽で誇大妄想的なイヴェント」として軽視されることの多かったインペリアル・ダーバーが、民衆的な部分も含めて、インド社会全体が関わった、興味深い歴史上の事象として捉えられ始めており、とりわけ、視覚メディア史的観点を持ち込むことにより、こうしたイヴェントが、インド社会全体との関係の中で持っていた（かもしれない）意義について、それを問い直そうとする研究が増加している。

インド社会、イギリス社会一般の文脈では、二〇〇三年、二〇一一年が、それぞれ一九〇三年ダーバー、一九一一年ダーバーが行われてから百周年にあたっており、両社会の出版・メディア業界が、それぞれ「メディア・イヴェント」を求めたことが、インペリアル・ダーバー研究の活性化に貢献したと考えられる。

以下では、英領インド帝国が行った、三度のインペリアル・ダーバーを通じての「イメージ」の創出について、視覚メディア史的観点から現在どのような研究が行われているのかを概観し、今後の展開の方向性を探りたい。

## （一）概観

一八七七年ダーバーについては、それを記録し、伝達する視覚メディアとしては、なお絵画が最も有力であり、イ

ヴェントのありようをフレームにおさめた写真の数は限られていた。他方、一九〇三年ダーバーに際しても多くの絵画が制作されたが、この時期には、より活発に写真が撮影されるようになっていた。一般の人々が簡易に操作できる写真機が出回るようになっており、こうした人々が、私的な目的から、インペリアル・ダーバーにまつわる情景を多くの写真に撮り、残した。映画に関しても、一九〇三年ダーバーを組織したインド副王カーゾンが、ダーバーのありようを映像に残すことに熱心だったため、それを撮影しようとする幾つかの団体に、撮影場所などに関して多大な便宜が図られた。一九一一年ダーバーに際しては、絵画は、インペリアル・ダーバーを記録する視覚メディアとしての主役の地位を、写真・映画によって完全に奪われた。同年のダーバーでは、ジョージ五世自身がインドへと赴き、イヴェントの主役を演じることになったため、英印両社会の関心はさらに高まっており、それを受けて、一九〇三年の際に比べて、より多くの写真が撮影され、より多くの団体が記録映画を撮影することになった。

それでは、それぞれの視覚メディアが記録したインペリアル・ダーバーのありように関して、メディア史的観点からの研究は、現在、どのような状況になっているのか。手短に言えば、絵画に関する研究はほとんど行われておらず、映画に関する研究も緒に就いたばかりである。他方、写真に関する研究は急速に進展している。

絵画に関する研究の乏しさは、何に起因するのか。インペリアル・ダーバーのように、大規模で多彩なイヴェントを記録するための視覚メディアとしては、単純に、写真・映像の方が適しており、一九〇三年ダーバー、一九一一年ダーバーに関しては、制作された絵画の数も限られているため、研究者の食指が動かない、ということなのかもしれない。しかし、言わば、インペリアル・ダーバーの「もう一方の主役」である藩王たち（本来の主役）は、イギリス国王Ⅱ（インド皇帝）を描いた肖像画に関しては、研究状況は非常に活発である。絵画は、イヴェント全体を記録するメディアとしては写真・映像に比べて劣るが、イヴェントに際して主要な役割を演じる人々のありようを、近接した形で捉えるメ

ディアとしては、なお大きな力を有している、とみなされ、多くの作品が残された。そしてそれらに基づく研究も活発に行われている、ということなのであろう。

インペリアル・ダーバーのありようを捉えた映画に関しては、徐々に研究が進められているが、それほど活発とは言えない。こうした状態は、活用することのできる資料の乏しさに起因している。一九〇三年ダーバーは映画化されたものの、撮影された絶対量が限られていた。他方、一九一一年ダーバーに関しては、かなりの量の映画が作成されたが、今日まで生き延びることができた、研究のための素材は多くない。従って、専門的な研究としては、一九〇三年ダーバーのありようを収めた映画について、二本の論文があるだけであり、あとは、インド映画史の概説書などで、先駆的なドキュメンタリー映画のジャンルとして「ダーバー映画」が存在した、と語られるのにとどまっている。<sup>11</sup>

一九一一年ダーバーに際してジョージ五世は、英領インド帝国の首都をカルカッタからデリーへ移すことを宣言した。当初は、シャージャハナバード（デリーの旧市街）に隣接する形で、その北方に存在したイギリス人たちの居住区域を拡充することが考えられた。しかし結局、シャージャハナバードの南方に、全く新しい形で「ニューデリー」が建設されることになった（シャージャハナバードは「オールドデリー」と呼ばれることになる）。このようにニューデリーは、その誕生のきっかけがインペリアル・ダーバーにあつたわけだが、話はそれだけにとどまらなかった。ニューデリーの都市構造そのものが、インペリアル・ダーバーという政治儀礼の延長線上にあつたから、である。ニューデリーは、インペリアル・ダーバーが生じさせた効果を、いわば常時醸し出すための「メディア」となることを意図されて構築された都市だった。つまり、ニューデリーは、インペリアル・ダーバーを主要なモチーフとする「テーマパーク」でもあつた。ニューデリーの造営は、イギリス人たちがインドを支配していた期間全体を通じて、最大規模の建築プロジェクトだった。従って、それについての研究の蓄積はそれなりに豊かなものである。そしてそれらの研究においては、ほぼ必

ず、上記のような理由から、インペリアル・ダーバーとニューデリー造営の間の関連が取り上げられている。

以上のような状態を前提にして、インペリアル・ダーバーに関する視覚メディア史的研究の中で、特に高まりを見せているテーマとしては、大きく三つの流れが存在する、と言えそうである。すなわち、①イヴェントとしてのダーバーそのものを捉えた、大量の写真を素材とする研究、②ダーバーの「もう一方の主役」だった藩王たちを捉えた、大量の肖像画・肖像写真を素材とする研究、③ニューデリー造営を焦点とする、英領インド帝国時代の建築物への関心を反映する研究、である。

以下では、①③のそれぞれについて、特に注目すべき研究を紹介してみたい。

## (二) イヴェントとしてのダーバーを捉えた、大量の写真を素材とする研究

後に、イギリス帝国の歴史に関する一般向けの著述を多く著わすことになるジャン・モリスが、一九八二年の時点で『帝国の見世物―スタイル、効果、バックス・ブリタニカ』を刊行しており、おそらくこれが、写真を素材とするダーバー研究の先駆だった。<sup>(12)</sup> 同書の第一章はイギリス帝国各地で行われた種々の政治的イヴェントを捉えた写真・絵画を紹介しており、その中では、一九〇三年ダーバーにまつわる写真・絵画が、とりわけて重要な地位を与えられている。

既に触れたように、二〇一一年が一九一一年ダーバーから百周年にあたっていたため、その前後に、同ダーバーを主題とする著述が幾つも刊行され、その中では写真資料が多用されていた。例えば、ラーマン／アガルワルが『一九一一年のデリー・ダーバー―決定版』を刊行し、一九一一年ダーバーの経緯について、その事実関係を具体的、簡潔にまとめている。<sup>(13)</sup> また、一九一一年ダーバーを見物するためにインドを訪れた、イギリスの貴族階級に属する女性が撮影した多数の写真が発見されたため、彼女の日記とともに、それらの写真を紹介する著述も刊行された。<sup>(14)</sup>



しかし、こうした流れの中で際立って重要だったと考えられるのは、ジュリー・コーデルが編者を務めた『権力と抵抗―三度のデリー即位ダーバー』である。<sup>15</sup> ニューデリーに所在するアルカジ財団が、現在、三度のインペリアル・ダーバーに関連する写真の収集を精力的に行っており、それらを存分に活用して編まれたのが、本書だった。九つの論文から構成され、冒頭の章では、三度のデリー・ダーバーについて編者コーデルが解説を行っている。続く第二章は、トポグラフィ的な観点から三度のデリー・ダーバーを捉えようとする。第三章は、どのような人々が三度のデリー・ダーバーを写真に収めたのかを分析し、第四章は、ニザーム（ハイデラバードの藩王）がデリー・ダーバーに参加した経緯を分析する。第五章では、編者コーデルが、必ずしもダーバーそのものにはとらわれない形で、藩王たちの肖像写真を分析している。第六章は、デリー・ダーバーに際してのハイデラバードのダヤル・スタジオの活動を分析する。第七章では、デリー・ダーバーにおいてララ・ディーン・ダヤル（ダヤル・スタジオの経営者）が、帝国主義／植民地主義的な視点とは大きく異なる視点から写真撮影を行っていた、との主張が展開される。第八章は、デリー・ダーバーを見つめる一般民衆が写真のフレームに収められたありようを分析し、掉尾の第九章では、デリー・ダーバーを捉えた写真の中では、帝国主義や植民地主義を暗示するのが直線であり、逆に曲線はそれらへの抵抗を暗示する、との主張が行われている。

### （三）ダーバーの「もう一方の主役」だった藩王たちを捉えた、大量の肖像画・肖像写真を素材とする研究

英領インド帝国時代の藩王たちを捉えた肖像画・肖像写真に関して、一九八〇年代前半に二つの著述が刊行された。その一つがクラーク・ワーシクの『藩王たちのインド―ラジャ・ディーン・ダヤルの残した写真 一八八四年から一九一〇年まで』であり、ニザーム、ダヤル、そしてニザームとダヤルの関係が簡潔に紹介された後、ダヤルが撮影し、

その子孫が保持していた写真が豊富に示されている。<sup>(16)</sup> 続いて一九八一年には、ジュデイス・ガットマンが『インドの眼を通して』を刊行し、その第四章「誰が写真家たちだったのか？」の中でダヤルが言及され、インドールのマハラジャをダヤルが撮影した肖像写真が示されている。<sup>(17)</sup> 第五章「彩色写真」ではニザームからの注文に応えてダヤルが撮影した写真が示されており、また、ダヤルの作品ではないが、インドの藩王層、貴族層に属する人物たちを撮影した肖像写真が多く紹介されている。第六章「文化の多くの層」でも、ニザームからの注文でダヤルの撮影した写真が複数枚掲げられている。

この分野での研究が急速に進展したのも二〇〇〇年代に入ってからであり、やはり、一九〇三年ダーバー、一九一一年ダーバーの百周年がきっかけだったであろう。まず、ダヤルその人の名をタイトルにした著述が、二〇〇三年にナレンドラ・ルーサーによって刊行された。<sup>(18)</sup> 同書には、現在のイギリス皇太子チャールズが前文を寄せており、ダヤルがニザームのお抱え写真家であっただけでなく、イギリス王室とも密接な関係を有していた、と主張している。<sup>(19)</sup>

さらに二〇〇八年に、ロージー・ルーウェリン・ジョーンズが編者となって刊行された『インド藩王国の肖像画——七〇〇年から一九四七年まで』は、藩王たちの肖像画・肖像写真に関する本格的な学問的著述として、おそらく初めてのものである。<sup>(20)</sup> 諸藩王家における王およびその家族たちの肖像画の系譜、来印したイギリス人肖像画家たちがもたらした影響、藩王たちが自らの表象に関して宝石や洋服をどのように用いたのか、藩王たちを写した肖像写真の系譜、インド大反乱以降の藩王たちの表象の仕方の変遷などについての章から構成されている。<sup>(21)</sup>

二〇〇九年には、一九世紀後半のインド社会において西洋絵画の手法をマスターし、藩王たち、およびその周辺の人々の肖像画を数多く残したことでも知られるラヴィ・ヴァルマに関して、新たな伝記がデーパンジャナ・バルによって刊行された。<sup>(22)</sup> さらに、ヴァルマについては、二〇一〇年にルピカ・チョーラによって、現時点での決定版とみな

すべき研究が刊行された。<sup>(23)</sup> とりわけ興味深いのは、自らもトラヴァンコア藩王家の出身だったヴァルマが、幾人かの藩王たちとの間で持った関係を分析した章と、オレオグラフを用いてヴァルマが自らの作品を量産し、その結果、インド社会全体の美意識にまで影響を及ぼすことになった経緯を明らかにした章である。<sup>(24)</sup>

二〇一三年には、「藩王たちの肖像写真家」ダヤルに関して、やはり現段階での決定版的な著述が刊行された。デイーパリ・デイワンとデボラ・ハットンの共著、『ラジャ・デイン・ダヤル——一九世紀インドの芸術家Ⅱ写真家』であり、アルカジ財団所蔵の大規模な写真コレクションを活用している。<sup>(25)</sup>

#### (四) ニューデリー造営を焦点とする、英領インド帝国時代の建築物への関心を反映する研究

ニューデリー造営についての研究としては、一九八一年に刊行されたロバート・アーヴィングの『インディアン・サマラーラッチェンス、ベイカー、帝国の首都デリー』が、先駆的な重要性を持っている。<sup>(26)</sup> 同書の主人公は、ラッチェンスとベイカーという、ニューデリーの設計を委ねられた二人の個性的なイギリス人建築家であり、彼らが「帝国の首都としてのデリー」をどのようにイメージしていたのか、そしてインド政庁との交渉を通じて、そうしたアイディアがどのように具体化されていったのかを明らかにしようとした。

他方、やはり一九八一年に、一九世紀から二十世紀前半にかけてのデリーの通史を描く、ナラヤニ・グプタの『二つの帝国のあいだのデリー——一八〇三年から一九三一年まで』が刊行された。<sup>(27)</sup> 同書は、ムガル帝国の都としてのオールドデリーと英領インド帝国の都としてのニューデリーを、時間的にも地理的にも統合して考えるべきだ、との発想を前面に押し出した初めての研究だった。

一九八〇年代には、英領インド期の建築全般についても、歴史家たちのあいだで関心の高まりが生じた。ニューデ

リーは英領インド期の建築を集成する場所でもあったため、そのような視角（建築物への関心）から、ニューデリーの造営が、いわば背景的に触れられることになった。初期の研究としては、一九八三年に刊行されたジャン・モリスとサイモン・ウインチェスターの『帝国の礎石―ラージの建築群』があり、英領インド期にニューデリーなどに建てられたイギリス的建築物を数多く紹介していた。<sup>(28)</sup> また、一九八九年には、トーマス・メトカーフが、英領インド期の建築を素材とすることで、文化と権力の関係について明らかにしようする作業の成果を刊行しており、とりわけ、インドⅡサラセニック様式の流行と、ニューデリーの造営に注目していた。<sup>(29)</sup>

一九九〇年代には、ニューデリー造営に関してとりわけて注目すべき研究は現われなかったが、二〇〇〇年代に入ると、ニューデリーの造営／英領インド期の建築に関する研究書の刊行が、目立って増え始めた。やはり、一九〇三年と一九一一年ダーバーの百周年に触発されていた、と考えられる。二〇〇一年に刊行された『ニューデリーに関する千年祭本』は、カルカッタからの遷都以後、現在に至るまでのデリーのありようを、多面的に捉えようとしていた。<sup>(30)</sup> また、二〇〇二年に刊行されたアンドレアス・フォルヴァーゼンの『帝国のデリー―インド帝国におけるイギリスの首都』は、ニューデリー造営にまつわる主要な論点を網羅的にカバーし、しかも、それぞれについて分析と実証を尽くしている。<sup>(31)</sup> さらにフォルヴァーゼンは、二〇〇四年に英領インド帝国時代のイギリス的建築物全般に関する著述も刊行した。<sup>(32)</sup>

他方、二〇〇五年に刊行されたジョティ・ホサグラハルの『現地の近代性―建築と都市主義の交渉』は、オールドデリーとニューデリーの関係ないし関連を重視すべきだ、とあらためて主張していた。<sup>(33)</sup> 二〇〇七年に刊行されたステイヴン・レッグの『植民地主義の空間―デリーの都市的統治性』でも、オールドデリーとニューデリーが、別個のものとして統治されながら、互いに影響を与えあってきた事実が探られている。<sup>(34)</sup> 二〇〇九年には、マルヴィカ・シングとラド

ラングシユ・ムカジーによって『ニューデリー―首都の形成』が刊行された。同書は、ニューデリー造営の過程を捉えた大量の写真を紹介しており、その中には広大な建築現場を上空から撮影した写真も多数含まれている。ニューデリーという都市全体が帝国のモニュメントとなるはずであつて、そのようなモニュメントが創造されていく過程さえも、「帝国建設の神話」の一部として語り継いでいくために、これらの写真が準備されたのであろう。<sup>(35)</sup>さらに二〇一二年には、視覚メディア史的観点を前面に出しながら、オールドデリーとニューデリーの連続性ないしは複合性を明らかにしようとする研究が二冊刊行されており、共にJ・P・ロステイが編者である。『デリー―レッド・フォートからライジンナへ』は、ムガル帝国の都としてのシャージャハナバード（＝オールドデリー）のイメージ、シャージャハナバードでの人々の生活のありよう、シャージャハナバードの建築物、ニューデリーの造営についての章から構成されている。<sup>(36)</sup>『デリー 三六〇度』は、インド大反乱直前の時期に、イギリス人植民地官僚からの注文に応じてインド人画家が作成した、デリー城の一角からシャージャハナバードを三六〇度にわたって見渡す形で精細に記録したパノラマ絵画を分析している。<sup>(37)</sup>

二〇一五年には、デイヴィッド・A・ジョンソンが『ニューデリー―最後の帝国都市』を刊行した。<sup>(38)</sup>ニューデリー造営に関わる総合的な研究としては、最新のものと思われる。ニューデリーの造営が決定され、実現されていたプロセスを、イギリス帝国史、インド近代史の双方の文脈の中で、政治的、社会的、経済的側面に注目しつつ、多面的に論じようとしている。<sup>(39)</sup>

## 二 インペリアル・ダーバーに関する、今後の研究の展望

以下では、前節で見たような、インペリアル・ダーバーに関する視覚メディア史的観点からの研究の進展を踏まえて、今後は、さらにどのような課題に注目し、また、どのような仕方ですそれにアプローチしていくことが可能なのかについて、考えたい。

(一)『英領インド帝国』というイメージを構築する」とのアイデアが、徐々に醸成されたプロセスに注目する一八五七年以前（インド大反乱が発生する以前）、イギリス人たちは、インド社会に対する彼らの支配を、被支配者であるインド人に明瞭に理解させるための「イメージ」を提起する必要性に関して、関心が乏しかった（そのようにする必要性を、感じていなかった）。実はこれこそが、インド人たちが、イギリス東インド会社という権力のありように違和感を抱いた主要な理由であり、インド大反乱を発生させる契機の一つともなった、と考えられる。

しかし、インド大反乱を鎮圧した後、「英領インド帝国」というイメージを、その「建国の物語」に基づいて構築しようとする動きが、イギリス人たちの間でもようやく生じ始めた。そして彼らは、英領インド帝国の「建国の物語」のタイムラインは次のようなものになる、と想定した。

・セポイの反乱が生じたが、イギリス人たちの軍事力が、それを徹底的に鎮圧した。ただし反乱の鎮圧に際しては、東インド会社への忠誠を維持したインド人兵士たち、イギリス人たちを支持した藩王たちからの協力が不可欠だった。  
・セポイの反乱が鎮圧された後、ヴィクトリア女王のインド社会全体に対する宣言が發布された（一八五八年一月一日）。それにより、イギリス王権がインドを直轄支配することが明示された。

・最後のムガル皇帝を被告とする裁判がラール・キラ（デリーにおける、ムガル皇帝の居城）で行われ、その結果、彼はビルマへ流刑にされた（一八五八年）。

・イギリス皇太子がインドへの公式訪問を行った（一八七五―七六年）。

・建国の物語の「大団円」として、ヴィクトリア女王が「インド女帝」に就任することが決定された（一八七六年）。

（二）イメージの基軸を成す「建国の物語」が公式化されたのを受け、それをインド社会全体に具体的にイメージさせ、受容させるためのイヴェントとしてインペリアル・ダーバーが企画され、実施されたことに注目する

一八七七年、イギリス人たちは、インド社会が保持する「権力」についてのイメージを再生し、活用するために、インド社会の王権が伝統的に行なってきたダーバーの慣行を換骨奪胎して利用した。そして、これ以後、イギリス国王Ⅱインド皇帝の即位ないし治世の継続を祝うためにデリーで行われた儀礼（イヴェント）は、「英領インド帝国というイメージ」を定期的に更新し、活性化させるための装置となり、ほぼ十年おきに行われることになった。すなわち、一八七七年のゴールデン・ジュビリー、一八九七年のダイアモンド・ジュビリー、一九〇三年のインペリアル・ダーバー、一九一一年のインペリアル・ダーバー、一九二一年の皇太子のインド訪問、一九三一年のニューデリーの開市式、である。

こうしたイヴェントでは、英領インド帝国を支える二つの柱（英領インド軍と藩王たち）が、イギリス国王Ⅱインド皇帝に対して忠誠を誓う様子が、インド社会全体に向けて体感的に、また、種々のメディアを通じて提示された。それは同時に、「英領インド帝国というイメージ」の、主要なセールスポイントを強調しようとするものでもあった。すなわ

ち、インド社会にとつての①安全の保証と、②継続性の保証である。より具体的に言えば、①英領インド軍の存在により、インド社会は内乱の危険を免れ、外敵の脅威から保護されている、との思いをインド人たちの多くに抱かせる。②藩王たちの存在を通じて、「新たな悪（権力の争奪をめぐる、インド社会の混乱）よりは、既に知っている悪（英領インド帝国による、人種差別的な支配）の方がましだ」との思いを彼らに受け入れさせることができる、と考えられていた。

### （三）イヴェントとしてのインペリアル・ダーバーの規模が、回を追うごとに大きくなったことに注目する

本来、インド社会において、新たな君主が即位を宣言し、権力者たちがそれを認証するダーバーは、「一般公開」を前提に行われてはいなかった（権力者たちの間でだけ行われる儀式だった）。しかしイギリス人たちは、回を重ねるごとに、彼らのダーバーの公開性を高めていった。これは、イギリス人たちが、一九世紀後半におけるイギリス本国社会の「大衆化」を背景にして、政治イヴェントを公開で行うことの効果と、その重要性を再び認識するようになっていたから、でもあった。

ルネサンス期においてヨーロッパの国王たちは、社会全般との「交歓」を演出するイヴェント（たとえば、入市式）を熱心に行った。<sup>(10)</sup>とりわけイギリス社会の政治のありようには、「演劇的な伝統」が強く存在していた。<sup>(11)</sup>しかし、絶対王政が終了して以後、イギリス王室に関しては、ロイヤル・イヴェントは一定の「閉ざされた空間」で行われることが多くなった。イギリス王室が再び「公開イヴェント」に積極的に関わる（それを主導する）ようになったきっかけは、一八五一年の万国博覧会だった。<sup>(12)</sup>これが、イギリス社会における大衆的メディアが出現する時期と重なっていたのは、偶然ではないであろう。



(四) 国際市場を意識した、ツーリズムの振興という意図が存在したことに注目する

インペリアル・ダーバーは、人々の「ツーリズム的な移動」に伴う、人類社会のグローバル化を促進する効果も伴っていた。イギリス人たちは、ツーリズムの振興によって「英領インド帝国というイメージ」を対内的にも対外的にも公式化する、という政治上の目的意識を有していた。しかし彼らの心中には、経済的な意図も当然存在した。移動手段の発展（蒸気船、鉄道）と、大衆的消費者がある程度豊かになったことで、移動にかかるコストを厭わなくなりつつあったことが重要だった。

イギリス王室は、既に一九世紀後半の段階で、ツーリズムを促進しようとする色彩の濃い形で、そのメンバーをヨーロッパ域外の社会へ派遣し始めていた。先鞭をつけたのが、皇太子時代のエドワード七世の海外訪問だった。彼はまず一八六〇年にカナダ・アメリカを訪問し、「大きな成功」を収めた。<sup>(43)</sup>一八六二年には、中東を訪れ、そして一八七五―七六年にインドを訪問した。デリーについては、イギリス人たちにとっては既に一八六〇年代に観光地化しつつあり、一八七〇年までには外国人ツーリスト一般にとっても十分に「リスペクタブル」な場所になっていた、とされる。<sup>(44)</sup>メディア・イヴェント化された形で皇太子の「インド公式訪問」によって、外国人ツーリストによるインド観光に拍車がかけられた、と考えられる。

とりわけ、一九〇三年ダーバーの主導者だったインド副王カーズンは、観光地としてのインドの開発可能性を強く意識していた。カーズン自身が、当時のイギリス社会の統治エリートの中では、際立って「ツーリスト的」な心性の持ち主だった。カーズンは、ムガル帝国時代のさまざまなモニュメントを修復・保全し、それらを活用することに熱心だった。こうしたカーズンの姿勢については、現在のインド社会において、文化財保護政策的な観点からだけではなく、ツーリズムの振興という点からも評価する機運が生じている。<sup>(45)</sup>

他方、インド社会の側では、イギリス人たちにより、こうした政治イヴェントを経験させられることを通じて、英領インド帝国が「国民国家ではない」ことを痛切に意識する者たちが現れつつあった。彼らの間では、英領インド帝国という「虚像」が、観光客、メディアを通じて、他の国民国家によって認証されてしまうことへの焦燥感が強まっていった。しかし、それと同時に彼らは、インペリアル・ダーバー的なメディア・イヴェントを通じて、他の国民国家の視線を自分たちの目的（真のインド国民国家の樹立）のために活用することができないか、ということにも気づき始めている。<sup>(46)</sup>

上記の（一）（四）の課題に取り組むのにあたっては、以下のようなアプローチを用いることが有用なのではないか。

（一）については、「建国の物語」のタイムラインは、基本的には「事実」に基づいていたのであろうが、実際にはそれは、多くの場合に（とりわけ、視覚）メディアを通じてイギリス社会、インド社会に対して提起され、両社会を構成する人々によって「記憶」されることになった「情報」だった。こうした（視覚）メディアの提起する「事実」の表象（情報）が累積していくことにより、「英領インド帝国というイメージ」が準備されたのではないか。

（二）については、インペリアル・ダーバー的イヴェントが、ほぼ十年おきに意識的に繰り返されたことに注目したい。そのようにすることで、インペリアル・ダーバーの本質が、「英領インド帝国」という名の「商品」を、英領インド軍と藩王たちの存在を二大セールスポイントとしてインド社会に売り込むための、「広告戦略」で（も）あったことが浮かび上がってくるのではないか。

（三）については、インペリアル・ダーバーというイヴェントが、どのような（視覚）メディアによって表象・伝達

され、その際に、それぞれのメディアがどのようにして役割分担を行っていたのかを明らかにすることにより、近代における政治的「マス・コミュニケーション」の原初的な姿を明らかにすることが可能になるのでは、と思われる。

(四) については、これまでのインペリアル・ダーバーの研究史において、ほぼ盲点になってきた部分だと考えられる。近代の大衆社会では、多くの人々が「セレブリティ」の振る舞いに魅了され、それによって自らの振る舞いを左右されてきた。しかし、そうした体験を経ることにより、人々のライフスタイルに新たな展望が開かれていく側面もあったことに注目したい。<sup>(47)</sup>

## 註

(1) 本田毅彦「イギリス国王Ⅱインド皇帝のソフト・パワー構築プロセス」、佐藤卓己／渡辺靖／柴内康文編『ソフト・パワーのメディア文化政策―国際発信力を求めて』新曜社、二〇一二年、三四―六三頁。

(2) 本田毅彦「一九〇三年インペリアル・ダーバーにカーゾンが託した夢」『帝京史学』三〇号、二〇一五年、四五五―五二二頁。

(3) 本田毅彦「一九一一年デリー・ダーバーとジョージ五世―国王Ⅱ皇帝によるインド社会との対面的コミュニケーションの試み」『史窓』七五号、二〇一八年、四七―六五頁。

(4) バーナード・コーン「ヴィクトリア朝インドにおける権威の表象」、E・ホブズボウム／T・レンジャー編（前川啓治他訳）『創られた伝統』紀伊國屋書店、一九九二年、二五九―三二二頁（原著の出版は一九八三年）。コーンの研究を引

き継いだのが、Alan Trevithick, 'Some Structural and Sequential Aspects of the British Imperial Assemblage at Delhi: 1877-1911', *Modern Asian Studies*, 24-3, 1990, pp. 561-578とあり、三回行なわれたデリー・ターバーと、それが行なわれなかった二回の事情を通観している。また、一九一一年ターバーに限っては、あるが、ジョン・M・マッケンジーが、近年の一般的な研究動向について紹介を行っている。John M. Mackenzie, 'Exhibiting empire at the Delhi Durbar of 1911: Imperial and cultural contexts', in John McAlee and John M. Mackenzie (eds.), *Exhibiting the Empire: Cultures of display and the British Empire* (Manchester: Manchester University Press, 2015), pp. 194-219.

(5) D・キャナダイン (平田雅博／細川道久訳)『虚飾の帝国―オリエンタリズムからオナメンタリズムへ』日本経済評論社、二〇〇四年。

(9) David Cannadine, *Aspects of aristocracy: grandeur and decline in modern Britain* (New Haven: Yale University Press, 1994), pp. 78-108.

(7) ジョセフ・S・ナイ (山岡洋一訳)『アメリカへの警告―21世紀国際政治のパワー・ゲーム』日本経済新聞出版社、二〇〇二年。同 (山岡洋一訳)『ソフト・パワー―21世紀国際政治を制する見えざる力』日本経済新聞出版社、二〇〇四年。同 (北沢格訳)『リーダー・パワー―21世紀型組織の指導者のために』日本経済新聞出版社、二〇〇八年。同 (山岡洋一、藤島京子訳)『スマート・パワー―21世紀を支配する新しい力』日本経済新聞出版社、二〇一一年。

(8) ムガル帝国、諸藩王国、英領インド帝国の間の接続・協調関係を意識しながら、視覚メディア史的観点を強調しつつ、ムガル皇帝たちとその宮廷、藩王たちとその宮廷のありようについて分析する研究が現れている。J. P. Losty and Malini Roy, *Mughal India: Art, Culture and Empire* (London: The British Library, 2013); Anna Jackson and Amin Jaffer (eds.), *Maharaja: The Splendour of India's Royal Courts* (London: V&A Publishing, 2009)。

- (9) インペリアル・ダーバーの活字メディアでの表象についての研究も、もちろん進展しつつある。Chandrika Kaul, *Communications, Media and the Imperial Experience: Britain and India in the Twentieth Century* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2014), pp. 19-70.
- (10) Stephen Bottomore, "An Amazing Quarter Mile of Moving Gold, Gems and Genealogy": filming India's 1902-3 Delhi Durbar', *Historical Journal of Film, Radio and Television*, 15-4, 1995, pp. 495-515; Luke McKernan, "The modern Elixir of Life: kinemacolor, royalty and the Delhi Durbar', *Film History*, 21, 2009, pp. 122-136.
- (11) Mihir Bose, *Bollywood: A History* (Stroud: Tempus, 2006), pp. 43-37; B.D. Garga, *From Raj to Swaraj: The non-fiction film in India* (New Delhi: Penguin, 2007), pp. 1-20; Vijaya Mulay, *From Rajahs and Yogis to Gandhi and Beyond* (London: Seagull Books, 2010), pp. 41-61.
- (12) Jan Morris, *The Spectacle of Empire: Style, Effect and the Pax Britannica* (London: Faber and Faber, 1982).
- (13) Sunil Raman and Rohit Agarwal, *Delhi Durbar, 1911: The Complete Story* (New Delhi: Lotus Collection, 2012).
- (14) Jessica Douglas-Home, *A Glimpse of Empire* (Wilby: Michael Russell, 2011).
- (15) Julie F. Codell (ed.), *Power and Resistance: The Delhi Coronation Durbars* (Ahmedabad: Mapin Publishing, 2012).
- (16) Clark Worswick, *Princely India: Photographs by Raja Deen Dayal 1834-1910* (New York: Pennwick Publishing, 1980).
- (17) Judith Mara Gutman, *Through Indian Eyes* (New York: Oxford University Press, 1982).
- (18) Narendra Luther, *Raja Deen Dayal: Prince of Photographers* (Hyderabad: Creative Point, 2003).
- (19) 藩王たちによって宗主権者だったイギリスのヴィクトリア女王が、同時期にどのようにして肖像写真の被写体になっ

ていたのか、についての研究も行われていない。Anne M. Lyden, *A Royal Passion: Queen Victoria and Photography* (Los Angeles: The J. Paul Getty Museum, 2014).

(20) Rosie Llewellyn-Jones (ed.), *Portraits in Princely India 1700–1947* (Mumbai: Marg Publications, 2008).

(21) 被写体だった藩主たちのパーソナル・ヒストリーについて、絵画・写真資料を活用する形での研究も進展している。たとえば、シク王国の元王でありながら、その生涯の大半をイギリスないしヨーロッパで過ごしたドゥリープ・シングについて、ピーター・バンスが二〇〇〇年代に二冊の著述を刊行した。Peter Bance, *The Duleep Singhs: The Photographic Album of Queen Victoria's Maharajah* (Stroud: Sutton Publishing, 2004); *Sovereign, Scoundrel and Rebel: Maharajah Duleep Singh and The Heirs of a Lost Kingdom* (London: Coronet House, 2009).

(22) Deepanjana Pal, *The Painter: A Life of Ravi Varma* (Noida: Random House India, 2009).

(23) Rupika Chawla, *Raja Ravi Varma: Painter of Colonial India* (Ahmedabad: Mapin Publishing, 2010).

(24) 他方で、ラヴィ・ヴァルマは、ムガル帝国時代に行われた皇帝や藩王たちの肖像画表現の系譜上にもあったが、そうした、ムガル期における政治権力者たちと肖像画家たちの関係についての研究も、活発になっている。William Dalrymple and Yuthika Sharma (eds.), *Princes and Painters in Mughal Delhi, 1707–1857* (New York: Asia Society, 2012).

(25) Deepali Dewan and Deborah Hutton, *Raja Deen Dayal: Artist Photographer in 19th-Century India* (Ahmedabad: Mapin Publishing, 2013).

(26) Robert Grant Irving, *Indian Summer: Lutyens, Baker and Imperial Delhi* (New Haven: Yale University Press, 1981).

(27) Narayani Gupta, *Delhi between Two Empires, 1803–1931: Society, Government and Urban Growth* (Delhi: Oxford

- University Press, 1981).
- (87) Jan Morris and Simon Winchester, *Stones of Empire: The Buildings of the Raj* (Oxford: Oxford University Press, 1983).
- (88) Thomas R. Metcalf, *An Imperial Vision: Indian Architecture and Britain's Raj* (London: Faber and Faber, 1989), pp. 211-239.
- (89) B. P. Singh and Pavan K. Varma (eds.), *The Millennium Book on New Delhi* (New Delhi: Oxford University Press, 2001).
- (90) Andreas Volwahren, *Imperial Delhi: The British Capital of the Indian Empire* (Munich: Prestel, 2002).
- (91) Andreas Volwahren, *Splendours of Imperial India: British Architecture in the 18th and 19th Centuries* (Munich: Prestel, 2004).
- (92) Jyoti Hosagrahar, *Indigenous Modernities: Negotiating architecture and urbanism* (London: Routledge, 2005).
- (93) Stephen Legg, *Spaces of Colonialism: Delhi's Urban Governmentalities* (Malden: Blackwell Publishing Ltd, 2007).
- (94) Malvika Singh and Rudrangshu Mukherjee, *New Delhi: Making of a Capital* (New Delhi: Roli Books, 2009).
- (95) J. P. Losty (ed.), *Delhi: Red Fort to Raisina* (New Delhi: Roli Books, 2012).
- (96) J. P. Losty (ed.), *Delhi 360°: Mazar Ali Khan's view from the Lahore Gate* (New Delhi: Roli Books, 2012).
- (97) David A. Johnson, *New Delhi: The Last Imperial City* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2015).
- (98) 1101 国史ひびき' Mushirul Hasan and Dinvar Patel (eds.), *From Chahib's Dilli to Lutyens' New Delhi* (New Delhi: Oxford University Press, 2014) などを含む' 国史ひびき' ヒマレーヤの歴史と文化を主題とする文書を' 本の森' の

形で紹介するのにとどまっている。

- (40) 小山啓子『フランス・ルネサンス王政と都市社会——リヨンを中心にして』九州大学出版会、二〇〇六年。
- (41) 井内太郎「凱旋入市式にみるルネサンス君主像」、指昭博編『王はいかに受け入れられたか——政治文化のイギリス史』刀水書房、二〇〇七年、一一—二九頁。竹内はるみ『グロリアーナの祝祭——エリザベス一世の文学表象』研究社、二〇一八年、二四—二九頁。
- (42) Jan Piggott, 'Reflections of Empire', *History Today*, April 2011, pp. 32–39.
- (43) Philip Buckner, 'The Invention of Tradition?: The Royal Tours of 1860 and 1901 to Canada', in Colin Coates (ed.), *Majesty in Canada: Essays on the role of royalty* (Toronto: Dunton Press, 2006), pp. 18–43; Frank Prochaska, *The Eagle and the Crown: Americans and the British Monarchy* (New Haven: Yale University Press, 2008), pp. 62–81.
- (44) Narayani Gupta, *op. cit.*, pp. 40, 86.
- (45) Santhi Kavuri-Bauer, *Monumental Matters: The Power, Subjectivity, and Space of India's Mughal Architecture* (Durham: Duke University Press, 2011), pp. 49–75.
- (46) インド共和国のエリートたちは、英領インド帝国によってしつらえられたニューデリーという壮大な政治的「舞台装置」を、独立後も存分に活用してきた。本田毅彦『「インド共和国の日」とデリー・ダーバー』『帝京史学』二五号、二〇一〇年、一〇九—一三九頁。
- (47) 東浩紀「ゲンロン0——観光客の哲学」ゲンロン、二〇一七年、一五四—一九八頁を参照。